





補者達は、話を聞いてもらえる場所（マスメディア、地元の公共施設、街頭など）ならどこへでも飛んで行って、語る。ことばの力で人を引きつけるというのは容易なことではない。聴衆に聞く耳を持ってもらうために、時代に沿った話し方を工夫する（かもしれない）。このように考えていくと、一見私たち国民の日常の生活とずいぶん乖離したところで展開しているような政治談話だが、その内実はレトリック・発話行為・主観性や感情の表現・話し手と聞き手の関係・聞き手への配慮・話し方（スピーチスタイル）など、言語学者の関心を引く要素がぎっしり詰まったものであることに気がつく。

政治談話の研究は、国内外共にCDA（批判談話研究）のアプローチを応用した談話研究が主流だが、政治家の発話を社会言語学者の視点から考察したもの（東 2007 など）や会話分析を行ったもの（Clayman & Heritage 2002, Clayman 他 2007 など）ものなど、新たな路線が加わりさらに拡大してきている。Ikeda (forthcoming) もその新しい路線の研究である。この研究では、ある議会審議の場に見られる「ヤジ」と進行中の審議の談話の関係を考察した。国会を始め審議の場のスピーチスタイルは大変仰々しい敬語を多用する。そんな中、着席し発言が許されていない議員達が始終発する「ヤジ」はたとえば、「行け！」「だめだろう！」、罵声のオンパレードである。ついこの間も、小沢民主党代表と福田総理大臣の党首討論中継（1月9日）を見ていたら、例の年金問題で福田氏が小沢氏の「加入者全員に一度すぐに通知をするべきだ」という主張に対して「（小沢さんが）おっしゃることはもっともなんですが」とコメントしたその時、間髪入れず「じゃあヤレヨ！」と着席している（野党の）誰かからのヤジが飛んだ。審議の場を詳細に観察すると、ヤジAに対する返答のヤジBなど様々な「声(voice)」が行き交い、どうやら「審議の場」の談話を構成するのは演壇の主演の二人だけではないようだ。本論文では丁寧体・敬体で着々と進行する審議の場で、ヤジ特有のこの荒々しいスピーチスタイルがもたらす役割はなにか、一考察を述べている。

政治談話の研究はそれ自体が独立した一分野でもあるし、また他分野の調査目的に適した「手段」にもなる。高瀬（2005）が「言葉政治」と呼ぶ、新しい世論を生み出すような強いカリスマ性のある政治談話特有のことばを追求するのもよし、政治コミュニケーションを調べることで見えてくる言語自体の魅力を掘り下げるのもよし。「政治とことば」は、様々な角度から考えていけばいい、それが多様であればあるほどおもしろい、と私は思う。

#### <参考文献>

- 東照二(2007) 『言語学者が政治家を丸裸にする』 文藝春秋  
高瀬淳一(2005) 『武器としての<言葉政治>—不利益分配時代の政治手法』 講談社  
Clayman, S. and Heritage, J. (2002). Questioning Presidents: Journalistic deference and adversarialness in the press conferences of Eisenhower and Reagan, *Journal of Communication* 52: 749-77.  
Clayman, S., Heritage, J., Elliott, M., Laurie McDonald, L. (2007). When does the watchdog bark?: Conditions of Aggressive Questioning in Presidential News Conference, *American Sociological Review* 72: 23-41.  
Ikeda, K. (forthcoming 2008). Audience participation through interjection: Japanese municipal council sessions. *Journal of Language and Politics*.







本論文は、研究者（実験者・調査者等）が参加者（被験者・回答者等）やその所属集団について持つ様々なステレオタイプを類型化すること、あるいは参加者が研究者に抱くステレオタイプの存在を指摘することなどを通して、そうしたステレオタイプから自由でない状況で行われる実験・調査の問題や得られるデータの問題が改めて批判的に認識されるべきだと主張する。この主張は、実験・調査に依拠する研究を行う様々な分野の研究者が傾聴すべき重要なものである。

また、本論文は、研究者と参加者の間での「完全な会話」を実現する上で必要となる実験・調査の具体的な工夫や、そうした中からさらに醸成されうる新しいステレオタイプへの留意が必要だと指摘する。こうした課題提示も、今後の実験・調査の新たな姿を模索していくための、具体的で射程の長い指摘だと言える。

以上のとおり、本論文は、論文著者の主に位置する社会心理学の領域から、およそ人を相手にして人からの情報を得て研究を構成する社会言語科学の多くの領域に向けて広く発信された有用な指摘や示唆に富む展望論文であり、そのトランス・ディシプリナリーな姿勢と視野の点で徳川宗賢賞優秀賞にふさわしい。

【付記】本論文著者は現在、当学会役員・徳川賞選考委員の立場にある。今年度の選考対象論文群（全13編）の一つの原著者であることに鑑み、本賞選考委員会では選考の公平性を実現するため、今年度審査の開始段階から最終決定段階に至るすべての審査過程に本論文著者が一切関与しない措置をとった。

#### ○ 萌芽賞

「話し合いへの印象に影響を及ぼす会話行動：プロの司会者と素人の印象認定の比較および話し合いの相互行為過程の分析」

『社会言語科学』第9巻第2号（2007）77頁－92頁

水上 悦雄・森本 郁代・大塚 裕子・鈴木 佳奈・井佐原 均

今日、司法、医療、科学技術などの分野において、専門家と非専門家とのコミュニケーションの重要性が強く認識されるようになってきている。このような背景のもと、本論文は、社会調査手法のひとつであるフォーカス・グループ・インタビューにおける専門家としてのモデレータに焦点を当て、その特徴を分析している。認知心理研究における熟達者と非熟達者の比較研究の考え方を応用して、プロのモデレータと素人の着目点の違いを明らかにし、その違いについて従来のコーパス分析の手法を発展させた談話分析を行っている。

方法論、議論に荒削りなところがあるが、コミュニケーションの専門家に焦点を当ててその暗黙知を明らかにしようとする試みは、専門家と非専門家とのコミュニケーションのあり方へ重要な示唆を与えることが期待されるだけでなく、コミュニケーション研究に新たな地平を開く可能性を秘めているといえよう。また、その方向性は、本学会が標榜するウェルフ

ェア・リングスティックスへ貢献することが強く期待される。これらの点が高く評価され、授賞にふさわしいものであると判断された。

#### 《徳川賞を受賞して》

岡 隆

言語とコミュニケーションを研究の核においたトランスディシプリナリーな学会を設立しようという、徳川宗賢名誉会長の呼び掛けに賛同し、この学会の設立の発起人に名を連ねさせていただきました。ちょうど10年前のことです。それ以来、このときの短慮を反省する毎日が続いていました。というのは、「トランスディシプリナリー」とはそもそも何であり、それはいかにして可能となるのか、細分化され特殊化された心理学の一領域に引きこもっている私がいかにしたら、それを標榜する学会に貢献できるのか、これらの疑問に答えを出せないままであったからです。それから10年、幸いなことに、『社会言語科学』で、「実験による言語行動の研究」の特集が編まれ、これらの疑問について、心理学の実験を経験してきた立場から、浅慮ながらも自分なりに考える機会に恵まれました。徳川名誉会長は本会設立後まもなく急逝され、私自身は直接に先生から多くのことを学ぶことはできませんでしたが、先生の精神を受け継ぐ本会の多くの方々からのお力添えにより、先生のお考えに少しでも近づくことができたのではないかと思います。ありがとうございました。

水上 悦雄・森本 郁代・大塚 裕子・鈴木 佳奈・井佐原 均

私たちにとって今回の受賞は、大変大きな意味を持っています。本研究は7名の参加者によるフォーカス・グループ・インタビューを対象としています。3年ほど前、是非このエキサイティングな相互行為を分析してみたいと研究を開始した頃は、まだ多人数会話を対象とする研究は少なく、そんな大人数の会話など、どうやって分析するのか、研究の意味があるのか、と研究の妥当性を疑問視する声もよく耳にしました。それでも、一緒に研究を進める仲間を増やしながらいままで続けてこられたのは、今後、「話し合いの力」を必要とする社会的な場面が増加することを確信していたからであり、なんとか社会に貢献できるような社会技術に応用できないかという思いがあったからです。ウェルフェアリングスティックスの精神を重視する徳川宗賢賞萌芽賞の受賞は、私たちのこの思いを評価していただいたことで、これほどうれしいことはありません。本研究を進めるにあたって、関わっていただいた全ての皆さまに、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

#### 《著者紹介》

岡 隆

東京大学文学部卒業、東京大学大学院社会学研究科修了。博士(社会学)。専修大学文学部、東京



大学文学部, 東京大学大学院人文社会系研究科での助教授を経て, 現在, 日本大学文理学部教授.  
最近の主要業績: 『交差カテゴリー化の認知的-動機的プロセス』(2007, 日本大学心理学研究, 28).  
『ステレオタイプ抑制の動機と方略』(大江朋子と共著, 2006, 社会心理学研究, 22). "A world of lies" (Bond, C. F., Jr. らと共著, 2006, Journal of Cross-Cultural Psychology, 37). 『仮説検証的研究: 言語的集団間バイアスを実際例として』(2006, 講座社会言語科学, 6, ひつじ書房). 『社会的認知研究のパーспекティブ 心と社会のインターフェイス』(編著, 2004, 培風館). 『心理学研究法 心を見つめる科学のまなざし』(高野陽太郎と共編著, 2004, 有斐閣). "Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression" (大江朋子と共著, 2003, Progress in Asian Social Psychology). 『社会心理学小辞典増補版』(古畑和孝と共編著, 2002, 有斐閣).

#### 水上 悦雄

神戸大学大学院自然科学研究科知能科学専攻修了. 博士(理学). 学習院大学計算機センター助手.  
(独)通信総合研究所社会的インタラクショングループ専攻研究員, (独)情報通信研究機構自然言語グループ専攻研究員を経て, 2007年より(株)ATR 音声言語コミュニケーション研究所研究員.  
主要論文: 水上悦雄・山下耕二「対話におけるフィラーの発話権保持機能の検証」(2007)『認知科学』14(4), 588-603. 水上悦雄・右田正夫「チャット会話の秩序—インターバル解析による会話構造の研究—」(2002)『認知科学』9(1), 77-88.

#### 森本 郁代

2002年大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程単位取得退学. 博士(言語文化学). (独)情報通信研究機構自然言語グループ専攻研究員を経て, 2006年より関西学院大学法学部准教授.  
主要論文: 森本郁代(2001)「地域日本語教育の批判的再検討—ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」山下仁・野呂香代子(編著)『正しさへの問い—批判的社会言語学の試み』pp. 215-247, 三元社. 森本郁代・水上悦雄・鈴木佳奈・大塚裕子・井佐原均(2006)「グループ・ディスカッションの相互行為過程の評価と分析のための指標—フォーカス・グループ・インタビューデータの分析から—」『ヒューマンインタフェース学会論文誌』Vol. 8, No. 1, pp. 117-128. 森本郁代(2006)「裁判員をいかに議論に引き込むか—評議進行の技法の検討」『法律時報』2007年1月号, pp. 117-122.

#### 大塚 裕子

東京女子大学文理学部日本文学科卒業. 神戸大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了. 博士(学術). (財)計量計画研究所言語情報研究室研究員. 現在に至る. 2001~2004年 郵政省通信総合研究所(現: 独立行政法人情報通信研究機構)けいはんな情報通信融合研究センター自然言語グループ特別研究員.  
主要論文: 大塚裕子・乾孝司・奥村学(2007)『意見分析エンジン—計算言語学と社会学の接点—』コロナ社. 第1, 2, 3, 5章. 大塚裕子(2007)環境の設計はなぜ必要か—評議における参加の

場と参加者の役割－『法律時報』VOL. 79 NO. 1 小特集：裁判員制度における評議－裁判官と裁判員のコミュニケーション, 日本評論社, pp. 123-128. 大塚裕子・丸元聡子・岩佐賢治・鈴木温・矢嶋宏光・奥村学・屋井鉄雄 (2007) 市民参画型道路計画における対話支援－対話型アンケートシステムの実装に向けて－『交通工学』Vol. 42, No. 2, 交通工学研究会, pp. 47-57.

鈴木 佳奈

大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程修了. 英国 University of Essex, Department of Language and Linguistics, PhD Course in Sociolinguistics 満期退学. 修士 (言語文化学). (独) 情報通信研究機構自然言語グループ技術補助員, 短時間研究員を経て 2007 年より (株) ATR 音声言語コミュニケーション研究所研究技術員.

主要論文: 鈴木佳奈(2008)「なにかが欠けている発話」に対する他者開始修復－会話の事例から「文法項の省略」を再考する－『社会言語科学』第 10 巻第 2 号(印刷中). Suzuki Kana, Morimoto Ikuyo, Mizukami Etsuo, Otsuka Hiroko, & Isahara Hiroshi. (2007) An exploratory study for analyzing interactional processes of group discussion: The case of a focus group interview.”, AI & Society. (Available Online: <http://www.springerlink.com/content/v471534213552611/?p=4de7eed9f25d41e8bc7ca759b5b5fbb3&pi=0>)

井佐原 均

京都大学大学院工学研究科電気工学専攻修了. 京都大学博士(工学) 現在, 独立行政法人情報通信研究機構 (N I C T) 自然言語グループリーダー兼タイ自然言語ラボラトリー(TCL)長. 神戸大学大学院自然科学研究科教授.

主要著書: 井佐原均・春野雅彦 (2000), Japanese-English aligned bilingual corpora, Kluwer. 成田真澄・井佐原均 (2002), 英文読解のプロセスと指導－コンピュータによる支援, 大修館書店.



2008 年 3 月 7 日

社会言語科学会 事業委員会発行